

12 際限ない要求行動のある自閉症児のルールに沿った社会生活スキルの獲得

～折り紙活動からアプローチした、新たな道への可能性～

国立秩父学園指導課 大野 晃、遠藤圭子、齋藤信哉、齋藤新一、高木晶子

1. はじめに

本児は入所前、自分の意図と違う・要求を受け入れてもらえない等の理由から不適応行動が表れ、集団生活を円滑に送る事が困難となり、家庭からB学園に一時保護そしてC病院へ医療保護入院となり、その後本学園に入所した。

学園では、地域で生活できる事を目指し、入所以前から行っていた本児の好きな「折り紙活動」時での不適応行動にまず焦点を当て、「決まりがある事」「決まりの内容」「活動の見通し」の理解、「要求方法」等の獲得に向けての支援を行った結果、社会的スキルの獲得の前提となるコミュニケーション手段の獲得もあり、不適応行動の軽減が大きく図れたので報告する。

2. 対象者のプロフィール

氏名： Aさん (18歳) 診断名：自閉症・知的障害

服薬状況：リスパダール・レボトミン・アキネトン・レキシシ・ビオフェルミン・コントミン・ロヒプノール・プルゼニド

発達検査：PEP-R 発達年齢 3歳3ヶ月、芽生え年齢 4歳8ヶ月

コミュニケーション：【表出性】言語による要求があるが不明瞭である。紙に書いて自分の要求などを伝えることが出来る。【受容性】簡単な2語文は、理解することができる。言語指示やジェスチャーでのやり取りは出来るが、写真や文字による確認が確実に本人に伝わる。

3. 支援方針

1) 不適応行動の同定

他害（人を叩く・噛む）・物壊し（机や椅子を投げて壊す・近くにある物を壊す）・所在不明・不適応行動を誘発する行為（奇声・地団駄を踏む）

2) 不適応行動の分析

C病院の記録から分析した結果、不適応行動の要因が、「見通しが持てない」「終わりが分からない」「欲しい物を獲得する要求手段が分からない」という仮説を立てた。よって、活動に「枠」を作る事で、「終わり」のルール理解と材料を要求するというコミュニケーションスキル（要求手段）が獲得できれば、不適応行動の軽減に繋がるのではないかと推察された。

4. 支援方法

	本人の動き	職員の動き
準備	ディスケジュールで折り紙を確認する	ディスケジュールで指さし又は、「次は？」の声かけ
	自室の椅子に座る	
	作品リストに必要な作品を文字で書き職員に渡す	物品を準備する
	椅子に座って物品を待つ	
	作品リストの文字と作品を確認する	作品リストに書いてある作品10個を本人に渡す
作業	物品(作品リスト・おかわりカード・折り紙・ペン・セロハンテープ・新聞紙5枚)とおかわりカードを受け取る(新聞紙2枚：Ⅱ期)(牛乳パック3個：Ⅲ期)	物品を渡す
	作品を作る	
	おかわりカードで追加物品を要求する(おりがみ2枚×2回)(セロハンテープ1個)(新聞紙2枚：Ⅱ期)	追加物品を用意する
	追加物品を受け取る	
	くださいカードで追加物品・個数を現物で確認する	
片付け	出来上がった作品をベツに並べ、遊ぶ	
	作品をカゴに入れ、職員に渡す	
	折り紙をそろえてカゴに入れる	
	使った物品をカゴに入れ、職員に渡す	渡されたカゴと作品を片付ける
	ディスケジュールの折り紙カードを裏返し、終わりを確認する	

5. 支援経過

- ・不適応行動の起因は、「3. 支援計画」の分析より、以下の3点を目標に挙げ支援した。
 - (1) 「活動の見通し＝スケジュール理解」への支援
 - (2) 枠組みの中で活動する体験への支援→活動には区切りがあること、物の要求には限りがあること
 - (3) 適切な要求手段（コミュニケーション手段）を獲得することで自分の意思を第三者に伝えるための支援

・Ⅰ期（X年度7月1日～31日）は、初めてルール（枠）を使った折り紙活動を行う。おかわりカードを使いスムーズなおかわり交換が出来る。しかし、ティッシュなどを使用してしまう事と、それに対する職員の支援の統一が課題となる。

・Ⅱ期（X年度10月1日～31日）に、新聞紙をおかわりカードに追加して活動を行う。おかわりカードに「新聞紙2枚」を追加する事で、職員の不統一はなくなり、材料の要求がなくなった。

・Ⅱ-2期（Y年度4月1日～30日）、上記の支援で問題なく活動していたが、半年経過して新たに牛乳パックや箱・段ボール等の材料を要求し始める。

・Ⅲ期（Y年度8月1日～31日）、牛乳パックのルール（枠）を決めて活動を行う。その結果、材料の要求はなくなる。

6. 支援結果

支援第Ⅰ期では、不適応行動が16回、うち11回は人に対する他害行動であった。が、第Ⅲ期には1回のみと大きく減少している。物壊し行為は第Ⅰ期に4回見られたが第Ⅲ期には1回と減少し、不適応行動全体では16回から6回と減少している。優先順位として高い他害行動と物壊し行為を見てみると、第Ⅰ期から第Ⅲ期までに86%減少した。

7. 考察

本児の本学園への入所目的は、将来地域で生活するために必要な社会的スキルの習得にある。そのために大きな障壁となっていた不適応行動、特に他害行動、物壊し行為が今回の支援によって激減された結果となった。C病院の記録に「奇声から他害行動にエスカレートする」という課題があったが、支援第Ⅲ期増加した「奇声」は、他害行動までエスカレートせずに奇声のみで抑えられたことは評価に値する。

今後はこれらの行動について、様々な視点から本児と本児を取り巻く環境との機能査定や機能分析により、相関関係・因果関係を明らかにしていくことで支援を行っていきたいと考える。

また、不適応行動の改善が見られたことで、現在、買い物支援・外食支援・余暇支援などを進めている。このような支援を通じて、社会的ルールという枠組みを更に体験・理解していくことで、近い将来地域生活移行への実現に向けてさらに支援を行っていきたいと考える。